昭和五十八年五月二十五日初版発行

著者　平龍生（たいらりゅうせい）
発行者　角川春樹

カドカワノベルズ

脱獄情死行（だつごくじょうしこう）

印刷所　暁印刷株式会社
製本所　株式会社大谷製本
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三　振替東京三-一九五二〇八
電話東京二六五-七二一一大代表　〒一〇二

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0293-775501-0946(0)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

昭和五十八年五月二十五日初版発行

著者　平龍生（たいらりゅうせい）
発行者　角川春樹

カドカワノベルズ

脱獄情死行（だつごくじょうしこう）

印刷所　暁印刷株式会社
製本所　株式会社大谷製本
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三　振替東京三―一九五二〇八
電話東京二六五―七二一一大代表　〒一〇二

¥640,-

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0293-775501-0946(0)

KADOKAWA NOVELS

脱獄情死行

平 龍生

目次

第一章　戦時下犯罪　9
第二章　鬼畜の森　45
第三章　脱獄行・つめ落し作戦　76
第四章　情炎の宴　108
第五章　忌避者の青春　142
第六章　愛は奪われ行く　171
第七章　炎の記憶　204

第一章　戦時下犯罪

1

低い菊水山系の山々が背後には立ちはだかっている。さらに北に踏み込めば、六甲の山脈が東西にと山の壁を張り巡らせていた。

神戸市街の西北部、山の極まった一郭に北神拘置所はあった。

昭和二十年二月五日。

戦時刑事特別法に問われ、一人の女が送られてきた。殺人・死体遺棄・放火の罪状が付されていた。

尾形玉江、二十六歳。兵庫県城崎、日高の出身で、前歴には体を売った一時期もある女であった。

灰色の車体をした木炭バスが寒風を切って突きすすむ。もっともそれほど威勢のいい姿ではない。窓には鉄格子が嵌められていたので護送車であることはわかるが、のろのろとした動きは死に瀕した甲虫の這行のようでもあった。青い煙を後部の燃料エンジンから吐き出している。

昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃による開戦以来、ほぼ三年が経過していた。

すでにサイパン島の日本軍は玉砕、B29の前進基地ができ、本土空襲は日常化していた。神戸の街にも十九年の暮れには米軍偵察機が九機飛来、その前触れどおりに昨二月四日、市内数か所に二・七キロ焼夷弾、爆弾などが投下された。いよいよ、神戸工業地帯にもアメリカ空軍の手は伸びてきたのだった。

尾形玉江の斜め前の席に共犯者の花房栄一がいた。右手は義手なのに、かっちりと両手錠が嚙まされていた。腰縄姿もどこか痛々しい。終始、花房は顔を上げなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

が、玉江は平然としていた。護送車の窓から湊川の街並みをあかず眺めていた。

湊川トンネルの暗い隧道を抜ける。市電が護送車に平行するかたちで背後についた。架線に菱型のパンタグラフの揺れが伝わり、青白いスパークの火花が散った。

二人を乗せた車は右へと折れる。神有電鉄（現・神戸電鉄）の湊川駅が右手に見えた。ここから急な坂道になる。木炭車は喘ぎ喘ぎ坂道を辿り始める。湊川公園の西南隅に佇つ湊川タワーが背後にあった。新開地名物の一つで高さは九十メートルは優にある。塔のてっぺんに上れば中国七州でさえ見ることが出来ると言われた当時としては東洋一の高い塔であった。敵機の恰好の目標になるので今、取り壊す話が出ていた。

湊川タワーにちらと玉江が視線を投げたのは、神戸の西の歓楽街、新開地にはそれなりの思い出があったからだ。

「おい、殺しをやっとるのにきさま何とも思うとらんのか。なあ、おまえら二人とも国賊や。切り裂いても腹の虫がおさまらん。ええ、おまえ、おまえのことや、女のくせしてからに！」

護送の巡査の一人が声を荒らげた。面を上げたままの玉江の態度に癇を立てたのだ。花房は神妙にしていたから罪を悔いているように見えたのだが、玉江は不逞の輩と映ったにちがいない。

玉江は聞き流した。

「なあ、いまは戦時中や、燃料かて足りんのにお前らを送り迎えや。ええかげんにせえ」

「お前が男なら敵の弾当てに最前線に出したる。どうせ人を殺したら死刑じゃ。同じこっちゃろ」

もう一人の巡査が毒づく。

それでも玉江は知らぬ顔を極め込んでいた。他のことを考えていた。

さっきから花房の視線が自分の下半身に注がれていた。上眼づかいの男の視線にはどこか切実なもの

があった。
外の景色に眼をやりながら、玉江はモンペ姿の下半身を少し開き加減にしてやった。
この、女の武器で、この男を殺人者に仕立て上げた。
玉江は抜けるように色が白く、豊満な肉体を持っていた。男好きのする色香にまどわされ、これまでにも何人もの男が玉江の餌食になった。花房栄一もそのうちの一人ということになる。
坂を登り詰めると、やっと車が一台通れるほどの隘路になった。せせこましい感じで軒を並べる民家が道の両側に張りついている。前方に赤煉瓦塀の障壁が望めた。
北へと向えば山の方角、そして南側は瀬戸内の海、東西に細長く伸びるのが神戸の街のたたずまいである。
周囲を赤煉瓦塀に囲まれた北神拘置所はまわりが八百メートル、ほぼ正四角形の領域内に何棟かの獄舎があった。
明治の遺構を思わせる赤煉瓦塀の高さは五メートルはある。一度、塀の中に入れば二度と抜け出せないと思わせるほどの威圧感があった。刑務所ではないから刑が確定するまでの仮住まいであったが、北舎の一郭には受刑者も収容されていた。戦時下のことで看守不足のため、刑務支所の施設としても利用されていたのだった。
正門の扉が開かれる。
さすがに玉江も唇を噛んだ。なぜか寒さを感じ、体を震わせた。
護送車が正門奥の第一看守詰所まで進んだ時、眼の前で、思わぬ出征風景に出喰わした。
とつぜん、中仕切りのもう一つの鉄門の向うから〝バンザイ、バンザイ〟の声が沸き起った。
それで、護送車はしばらく足止めを喰う。鉄門の向うにいくつもの収容者の顔があった。五メートルほどの高さのコンクリート塀から向うの領域が囚わ

れた者たちの居住区となる。外部との接触を断つために内壁が設けられていたのである。
正門に詰めている看守の表情もどこか浮き立って見えた。
「ここからも出征兵士を送ることになりました。名誉なことです」
護送車から降り立った巡査との間でそんな会話が取り交わされた。
刑期満了を待たずして受刑応召者が戦地に送られていた。一度は不合格ではねられた丙種合格者も狩り集められて兵役に就かされていた時代のことである。

勝ってくるぞと勇ましく
誓って国を出たからは
手柄たてずに死なれよか

内塀の中扉が開かれ、二名の出征兵士が看守に導かれて姿を現わした。その背後で受刑者たちが仲間を送る歌をうたっていた。
玉江の眼にも二人の受刑応召者の姿は見えた。白いタスキを肩から斜めに掛けている。ちゃんと二人の名前も読めた。
「いろいろお世話になりました。どうかお体に気をつけて下さい。日本男子として立派に戦ってまいります」
二人の男は衛門の看守に挙手の礼をしてから正門の外に消えた。男たちは眼に泪さえ浮かべていた。
もう、騒ぎはおさまっていた。
所定通りの引継ぎ事務が終り、花房栄一と尾形玉江は別々の監房に移された。
やはり花房栄一は自分を罪に導いた女にちらと視線を送ったが、彼女は無表情を装った。もう男と女の感情は薄れていた。
冷え冷えとした長いコンクリート道の廊下を何度か右左に曲がって進む。そのたびに、鉄門があり、

開錠と施錠の音が冷たく響いた。蟻一匹、這い出すことのないように、建物の内部は二重三重の防護の構造を持っていた。行きついた先は南舎の独居房であった。独居房に入る前に手錠が外され、別室で身体検査をされる。

部屋を入ると脇の机を前に老看守が坐っていた。着衣をとるよう命ぜられた。

女看守が立ち合ったが、男の視線にさらされることには変りはなかった。

だが、玉江はためらいは見せなかった。手際よく着衣を脱いだ。

「はい、こちらを向いて」

女看守が事務的に告げる。肌着を捨て、上半身裸になる。モンペもとった。

「ぜんぶ脱ぐのよ」

言われて玉江はズロースに手を掛けた。さっと取り払った。豊かな腰が露出された。玉江は男の老看守の視線がその下半身に注がれていることを知っていた。〝なんとかしてここからは逃げてやる〟護送車の中でも考えたことだった。老看守が、彼女の担当になることは初めに知らされた。

メリヤスの肌着を頭からすっぽりとった時、ヘヤーピンが一本、毛髪にからみついたのに気付いていた。手で髪にふれる仕種をし、床に落した。老看守の眼が背後にある。

女看守は、玉江に両脚を大きく開くように命じた。股間になにか隠されていないか探るためのものだった。

玉江は脚を開いたままの姿勢で上半身を折った。足元のヘヤーピンを拾った。

机の前の担当看守の位置からは玉江の股間は丸見えのはずであった。むりに折った上体を横にずらせた。乳房もその視野におく。

鉛筆を持った右手を固く握り締めたまま老看守はこの挑戦的な新入りの大胆なポーズに眼をしばたたいた。

ほんの数秒のことであった。
のろのろした態度で着衣を拾う。向き直った時、玉江は担当の男の眼を見返した。色っぽい眼になった。
担当看守の名は林亥之助、年齢は六十一歳になる。
「ええか、いまは戦時下の非常時や。規則をよう守って模範囚になることがお前のつとめや。ええな」
動揺を隠すように少し威丈高に言い放つ。
玉江は林看守に引き立てられ独居房棟に足を踏み入れる。ここだけ別棟になっていて、戸外に通路があった。看守詰所の前を過ぎるとここにも鉄枠の扉があり、仄暗い闇がその奥にはあった。
玉江は林看守の手元を見ていた。鍵を差し込む時、その手がぶるぶると震えた。中風の気があるらしい。
「おまえ、ええ体してるな」
独居棟に押し込められた時、林看守は背後から声を掛けてきた。玉江には舌なめずりしている男の顔が想像できた。
「うち、男はんには好かれるほうや」
ちょっと小首を傾げ、しなを作ってみせる。後れ毛が立つているのが何とも色っぽかった。林看守は遠慮のない眼で、首のあたりから下半身までを眺め渡した。ちらと見た股間の黒い飾り毛のことが頭をかすめた。
拘置監三〇三号室。囚人呼称一二一番が尾形玉江の識別番号である。
「寒うなったら言い、毛布持ってきてやるよってにな。これでもわしは女子には親切なほうなんや。へへ」
三畳一間ほどの独居房の中で林看守はやに下った声を出した。下唇の厚い、好色そうな顔であった。
がちゃっと弾機がはね、シリンダー錠の鍵がおりた。完全に外の世界と隔絶されていた。尾形玉江の身柄は、コンクリート壁の細長い一室に収監された。

2

二月四日のこと。

昨夜の出来事の一部始終が、まだ生々しく玉江の脳裡には刻まれていた。

ほんとうなら、彼女が仕組んだ今度の事件は完全犯罪のはずだった。

それが……いまは囚われの身、その不運を嘆かずにはいられない心境であった。欲と情痴のからんだ殺人事件、ちょっとだけパーフェクトゲームの歯車が狂ったのだ。

湊東区多聞通りの席亭〝花隈〟は十九年一月の建物の強制疎開令の適用はまぬがれたが、三月に出された〝高級享楽の停止〟策によって事実上、廃業に追い込まれた。

芸者や待合の仲居なども勤労挺身隊の一員に加えられたご時勢である。中には福原の遊郭街に鞍替した女もいた。軍需工場で働くくらいではめしが食っていけなくなったからである。

福原は繁華街新開地と、海側の一部に造船工場を控えていたことで戦時中でも賑わいを見せていた。およそ九十数軒の妓楼と千四百人余の遊女、福原は一夜の契りののちに戦地に発つ兵士でも溢れていた。

席亭〝花隈〟は遊女を抱えていなかったので、この恩恵にはあずかれなかった。酒食をもてなす料亭は軍の高官や景気のいい軍需工場のお偉方で一時は賑わったが、戦況が不利になるにつれて、ぜいたくは敵となり、商売が成り立たなくなった。その矢先の高級享楽停止の通達であった。

席亭〝花隈〟の主人、菅家吉蔵を殺すことを決意したのは昨年の年の暮れのことである。玉江は内縁の妻という立場にあった。五十二歳の男と二十五歳の女。世間からみれば色仕掛けで資産家の男にとり入っている女というのが彼女への風評であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong